

全国野鳥密猟対策連絡会

活動名	野鳥保護を目的とした密猟・違法飼養・違法販売根絶のための啓蒙活動
活動区分	国内の民間団体が行う国内の環境保全のための活動
活動形態	知識の提供・普及啓発
活動分野	自然保護・保全・復元
活動の背景	
<p>全国密猟対策連絡会の発足後、平成10年度には環境財団からの助成によるメジロ識別マニュアルの作成、サイトへの参加、マレーシア、中国への野鳥販売実態、及び生息調査、そしてシンポジウムを年1回実施、今年で17回目を迎える。それらの活動を通じて、野生鳥獣保護のための積極的な活動を続けてきた。各地での密猟の取り締まりが活発になるとともに、政府への働きかけにより「鳥獣の保護および狩猟の適正化に関する法律」の改正や主な野鳥の輸入先である中国の輸出規制など一定の成果を上げることが出来た。</p> <p>しかしながら違法に輸入あるいは捕獲した鳥獣の違法販売や飼育は続いており、言い逃れの手口も巧妙になりつつある。また、行政や市民が密猟問題に係わる際の役割や指針を示す情報が不足しているため、摘発の現場で混乱を引き起こす事態も生じている。さらに、長年にわたり飼育されていた鳥獣はリハビリなしでは自然復帰が困難であるが、現在はそのための施設、ノウハウの蓄積ともに不十分な状態にある。</p>	
活動概要	
<p>全国野鳥密猟対策連絡会（通称：密対連）は、平成4年に（財）日本野鳥の会「かすみ網対策会議」が移行し、密猟防止に向けて専門に取り組みる目的で発足した組織である。全国の日本野鳥の会支部や行政、警察等の関係機関の協力を得ながら活動を進めている。</p> <p>具体的な活動としては、野鳥の違法な捕獲、違法飼養、違法販売等の防止にむけて調査やパトロールの実施、また全国一斉野鳥販売店調査等を行って来ている。それらの情報は、主に当会のホームページ「密猟110番」に寄せられ、警察、行政と連携しながら調査や対策を講じて来たい。</p> <p>最近では、密猟者の手口が巧妙になり、全く根拠の無い「証明書」添付したり、また、会員証を偽造したりして警察の目さえも欺いている。（京都、2000年8月20日）それらを暴く手段としては、個体の識別鑑定以外に方法はなく、警察庁や環境省のご理解と同時に、環境省鳥類標識調査に従事するボランティアの協力のもと、野鳥の種の個体識別という制度を取り入れ、密猟摘発に一層の期待が寄せられるようになってきた。</p> <p>当会では平成17年度より地球環境基金の助成を受け、下記の通り国内において野鳥を取り巻く環境を守るための自然保護活動の実践している。</p>	
期待される効果（目標と将来像）	
<p>密猟対策の活動成果を数字で現わすのは非常に難しいが、これまでの活動で着実に各地の密猟減少に貢献してきている。具体的には以下の活動による効果が期待できる。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 日本各地で開催する市民向けのセミナー、シンポジウムはメジロなどの野鳥の密猟や違法飼養が未だに続いている地域での知識の普及ができる。これまでのこうした活動により、地域のNGO、専門家、行政、警察など様々なセクターの協力関係が構築され、密猟問題への啓蒙だけでなく、野鳥に対する違法行為根絶への活動が具体化できる。 2. 専門家の育成により、各地で、密猟対策の活動が活性化し、地元主管で密猟対策講座やセミナーの開催が行われ、各地の密猟対策の前進が大いに期待できる。 3. 専門家や専門的機関が利用できるマニュアルの作成や、市民向けの啓蒙冊子や配布用パンフレット作成、違法捕獲、違法販売、違法飼養に関する事例集や野鳥密猟の映像資料DVDの作製により、専門家、各機関、一般市民への具体的対策へのノウハウを供給でき、各地のNGOや専門機関による密猟対策の活性化が期待できる。 	

助成1年目の実施内容

市民向けのセミナー、シンポジウムの開催により、メジロなどの野鳥の密猟や違法飼養が未だに続いている地域での違法行為根絶に寄与し、関係機関の積極的な協力が得られるようになり市民のみならず知識の普及が進みつつある。

助成2年目の実施内容及び今後のスケジュール(3年目の予定を含む。)

2種の識別鑑定を行うための専門家育成のため、東京で初めて研修会を開催した。会場は超満員。各地で、発展的な密猟対策講座の開催やセミナーの開催の足がかりになり、各地の密猟対策の前進が期待できる。

3. 研修会に参加できなかった方のために映像資料DVDをの作製し、専門家、各機関、一般市民への具体的な対策へのノウハウを供給できる。

4. 21年春、環境省は密猟防止を目的に材効、材刈、牝の野鳥識別マニュアルを作成した。メジロ、ウグイスに続いて、関係機関が密猟犯罪の摘発に役立たせことができるよう、密対連版の「識別マニュアル」の作成が急がれる。

これまでの活動についての自己評価・今後の展望

【自己評価】

密猟、違法飼養、違法販売等を止めさせ、野鳥保護の活動をするために、前年度までは専門家や行政等の担当者への知識の普及をおこなってきたが、今年度は一般市民への知識の普及、啓蒙活動をテーマとした。各地の現状をアンケート調査した資料を基に、密猟、違法飼養が深刻な青森、愛媛、大阪の3地域で市民向けセミナー、宮城でシンポジウムを開催した。セミナーでは密猟防止対策の冊子「野の鳥は野に」を配布した。各開催地域ではその後密猟防止の活動が活発となり、テーマ設定、プロジェクトの実施は妥当であったと考えられる。

【反省・課題】

「新密猟対策マニュアル」を分かりやすくまとめた市民向けの冊子「野の鳥は野に」を作成配布する目標は達成できた。市民向けのセミナーは参加人数が当初の目標であった各100名づつに達しなかったが、市民の関心は高く十分に目標は達成された。また、野鳥観察会等でも冊子を配布し、知識の普及という目標も達成できた。密猟事例集の作成は資料をまとめる段階に至らなかった。緊急性の高い地域で市民啓蒙のセミナーを開催したため、当初予定していた新潟県、岡山県、鹿児島県でのセミナーが開催できなかった

【今後の展望】

活動の手法としてHPの利用による速やかな情報の発信も行われている。また、資料を駆使した地方への知識の普及も活発であり、密猟対策をリードした活動が行われている。しかしながら、日本各地で未だに密猟、違法飼養が続いており、もっと多くの地域で普及、啓蒙活動をすることが課題である。また、密猟事例集の作成などの、関係資料の充実が求められているところである。今後も資料の出版、市民への啓蒙活動の持続、密猟対策に関わる専門家の育成を行い、さらに広い分野の人々とも連携してゆく。

全国公害患者の会連合会

活動名	持続可能な社会の形成をめざした公害地域の環境再生推進と普及啓発活動
活動区分	八．国内の民間団体が行う国内の環境保全のための活動
活動形態	b．知識の提供・普及啓発
活動分野	i．総合環境保全活動
活動の背景	<p>全国公害患者と家族の会は、当事者自身が立ち上がり、主体となって行動する中で1991年12月「世界NGO会議」(フランス、150カ国862名参加)をはじめとして、国内外への公害経験の発信や被害者交流をつづけ、被害者の直接の交流および情報発信の重要性を感じてきた。現在、中国をはじめとする東アジアを中心に経済成長が急激にすすみ、それに伴い産業公害がさらに激しくなり、その被害はそれら一国の問題のみならず、国際的な問題となっている。</p> <p>そうした中で、真に公害・環境問題の解決をめざすには、当事者が主体となり活動するといった公害経験の発信や被害者交流に加え、日本の公害地域で取り組まれている「環境再生」の考え方や情報が今後、必要となってきた。公害を経験し、そこから環境再生へととりくむ日本の事例は非常に重要なモデルであるため、日本国内外への「公害地域の環境再生」の取り組みとその情報発信が課題となっている。</p>
活動概要	<p>「国内外における公害・環境問題」の真の解決に向けて、大気汚染公害地域で環境再生・まちづくりをおこなうNPOや、日本環境会議の研究者・弁護士らと協力して、環境再生の視点も含めた、被害者救済・公害経験を国内外に伝え、各地域の市民が解決に向けて取り組む手助けとなるようにしていく。</p> <p>具体的には、インターネットや直接の交流を通じた情報発信、その際に受信側のニーズにあうように検討を行うとともに、大気汚染公害地域での環境再生を国内外の人々に伝えるための資料作成および現地見学受け入れ態勢の整備検討を行う。また、APNEC9(第9回アジア・太平洋NGO環境会議)において、公害経験を、公益訴訟(個人の利害だけにかかわるのでなく社会全体にとって意義のある訴訟)という視点でとらえたセミナーなどを開催する。</p> <p>さらに、国内のNPOと協力し連携して取り組みをすすめられるよう、参加地域を増やし体制の強化をすすめる。</p>
期待される効果(目標と将来像)	<p>目標:「二度と公害をおこさない、子や孫に青い空を」の実現</p> <p>「国内外における公害・環境問題の解決」それにはストック公害も含み、「環境再生」まで含んだ解決</p> <p>助成事業での目的</p> <ul style="list-style-type: none"> 被害者救済、公害経験を、「環境再生」という視点を加えて、国内外へ発信する。発信することにより、各地域の市民(当事者)が取り組む手助けとなる。 国内については、当事者だけでなく、環境再生を担う人材の育成。および地域が連携して推進できる体制づくり
助成1年目の実施内容	<p>環境再生・まちづくりを推進し、情報発信するために、以下の活動を実施した。</p> <p>1.まちづくり委員会の開催</p> <p>日本国内でおこなわれている「環境再生」の情報交換・経験交流および現地見学をおこなうまちづくり委員会を6回開催し、「環境再生・地域再生」推進に向けた課題を共有化し、より活動が進むための議論をすすめた。</p> <p>2.報告会「公害経験と環境再生 そのアジアへの発信」開催と環境再生に関する提言</p> <p>まちづくり委員会での議論をふまえ、アジアの事例を共有化し、地球温暖化問題の視点を含めて、国内外にわたって環境再生・地域再生を推進する報告会を開催した(9/21)。また、まちづくり委員会および報告会の議論をふまえ、今後の取り組みに関する提言を座長がまとめた。</p> <p>3.「環境再生」に関する情報発信・交流ツールの作成</p> <p>まちづくり委員会や報告会の議論をもとに、国内外に「環境再生」に関する情報発信をおこなうインターネットサイトを整備し、日本語・英語・中国語・韓国語での情報発信をおこなっている。</p>

助成 2 年目の実施内容及び今後のスケジュール (3 年目の予定を含む。)

平成 21 年 4~10 月: セミナー実施のための打合せおよび、ニーズ把握の視察受け入れに関する検討会開催

- ・ 1ヶ月に1回程度
- ・ セミナー開催にむけ、企画推進、海外ゲスト等の派遣依頼など
- ・ ニーズ把握の視察受け入れの情報交換、体制検討、プログラムの提案など
- ・ 現地見学用資料作成
- ・ パネル作成

平成 21 年 11 月: セミナーおよびパネル展示交流会の実施

- ・ セミナー実施
- ・ パネル展示交流会実施
- ・ ニーズ把握の視察受け入れの実施および、結果の整理・検討

平成 22 年 1~3 月: 情報発信ツールへの報告 (インターネットサイト)・成果をとりまとめた報告書作成。

これまでの活動についての自己評価・今後の展望

平成 21 年度事業の具体的な取り組みや成果はこれからであるため、平成 20 年度の実績報告書から抜粋した。昨年度に関する評価等になっていることをご了承下さい。

[自己評価]

- ・ 国内で大気汚染公害地域の環境再生・まちづくりをおこなう団体の横の連携を強めることができたのは大きな成果である。まちづくり委員会での議論でもあったが、大気汚染公害裁判の解決の時期の違いが、各地での環境再生の活動の格差にもなっている。そうしたなか、相互に情報交換・共有し、各地での取り組みに活かし、連携して環境再生・まちづくりを進める体制ができつつあることは大きな前進である。平成 21 年度事業においては、新たな団体からの参加もあり、国内での連携をさらに深めることができつつある。
- ・ 報告会やまちづくり委員会の開催を通じ、各地の NPO や研究者との連携や情報を得ることが出来た。しかし、企業や行政の参加は少なく、それらとの連携は今後さらに取り組むべき課題である。
- ・ 報告会に多くの学生や留学生の参加があり、また国外への情報発信の手伝いをしてくれた留学生の関わりなど、本事業を通じて、次の世代を担う日本の若者や中国・韓国の若者への情報発信を行うことができた。これは、当初想定していなかった効果であり、今後の取り組みを行う際にも、うまく関わってもらえるよう工夫をして、効果的に実施していくべきである。

[反省・課題]

- ・ 報告会を通じて、中国・韓国と比較し日本の大気汚染公害とその運動、さらには環境再生について客観的に捉えることができた (中国・韓国の日本よりも進んでいる取り組みなど)。その上で、日本の経験をどのように発信し、情報交換していくか、さらに日本での取り組みにどう活かすかといった点については引き続き、検討していく必要がある。
- ・ 情報発信ツールとして、インターネットサイトの充実をはかったが、まちづくり委員会での議論により、掲載地図の変更や地域の情報を追加して作成することになった。よりよいものができたが、年度末近くの追加作業となったため、今後は余裕をもった作業スケジュールを組めるようにしたい。

[今後の展望]

- ・ 今後の展望としては、本事業により築きつつある国内の連携をいかし、国外へのより積極的な情報発信・情報共有をすすめ、大気汚染公害地域をめぐるツアーの実施など検討・実施すると同時に環境公益訴訟など日本国内で遅れている取り組みなど、他国の事例を活かして、公害のない、健康に暮らせるまちづくり、環境再生をすすめていきたい。

(特定) 三国湊魅力づくりPJ

活動名	三国湊緑のリレープロジェクト～賑わいの森づくり～
活動区分	国内の民間団体が行う国内の環境保全のための活動
活動形態	実践
活動分野	総合環境保全活動
活動の背景	
<p>三国湊（福井県坂井市三国町）は、九頭竜川河口に位置し、海（日本海及び景勝東尋坊を中心とした海岸）、里山（農業が盛んな丘陵地）、川（九頭竜川）、旧市街（北前舟で栄えた古い町並み）の豊かな自然と歴史文化が凝縮された町である。三国湊の豊かな自然景観を構成していた松林・里山が壊滅的な状態にあるのに対し、手入れする人の不在、リスクの高い伐木処理には専門家の協力・莫大な処理費用が必要とされている。地球温暖化への関心等から森づくりに対する意識が民・行政・企業を問わず地域・県下・県外で高まっており、活動をコーディネートしていく人材と世代や関心に応じたプログラムが必要とされている。平成 19 年度の地球環境基金助成事業「ナホトカ号重油流出事故から 10 年～三国湊型環境教育モデルの構築・普及活動」を契機に、住民・ボランティア・行政・専門家とのパートナーシップによる森づくりのしくみ、実践、広がり活動に取り組んできた。</p>	
活動概要	
<p>活動フィールドを中心に下記を実施する。</p> <p>松枯れの伐倒・搬出・処理実践活動を、地元住民・専門家と共に実施。</p> <p>賑わいの森づくりとして、きのこの森づくりとカブトムシの里づくりを実施。</p> <p>ヨソモノ・ワカモノと緑をつなぐ「三国湊型ワークキャンプ（1泊2日～2泊3日）」 都市民・ヨソモノ・学生・社会人を対象に共同生活をしながら、専門家による森づくり技術の習得と地域活性化に寄与する森づくりについてグループディスカッションを行い、多面的な森づくりを行う。</p> <p>地域と緑をつなぐ「みどりレーシステム」 - 地域の民宿・飲食店などの売上の一部で地域環境の保全をしていく仕組みづくり。</p> <p>「森・川・海の診断」 - 三国地区と九頭竜川流域で森の現状と生物多様性及び川・海の環境を調査予定。</p> <p>上記を地域の優れた人材である専門家・中高年・高齢者に教わりながら実施する。</p>	
期待される効果（目標と将来像）	
<p>三国での森づくりを通じて、世代間と地域間の交流を促進することができる。</p> <p>森・川・海の調査を行うことで、生物の多様な環境を保全していくことができる。</p> <p>森・川・海の周辺環境をわかりやすく親しみやすいものにするプログラムの充実を図ることで、参加者や賛同者をより拡大していくことができる。</p> <p>コーディネーター養成によって活動が持続可能なものとなり、量質両面で拡大していくことができる。</p> <p>高まった森づくりへの関心を世代と関心に応じた体験・実践プログラムにつなげていくことができる。</p> <p>ワークキャンプを通じ県内外ボランティアが三国を訪れることで、地域社会と経済の活性化に寄与する。</p>	
助成 1 年目の実施内容	
<p>平成 20 年度は森づくりの しくみ（ボランティア窓口の設置、民有地賃借、サポーターズクラブ設置） 実践（枯松伐倒、下刈・間伐・植樹活動、モデル林形成） 広がり（漁・農・林・観光業とのパートナーシップ、滞在ボランティアの受け入れ体制）に取り組んできた。</p>	

助成2年目の実施内容及び今後のスケジュール(3年目の予定を含む。)

平成21年県植樹祭を契機に枯松の処理が行政により進んだので、今年度からはフィールドを移して里山活動を主体に行う。

松枯や枯木の伐倒・搬出・処理など実践活動を地元住民・専門家とともに実施する。

賑わいの森づくりとして、きのこの森づくり・かぶとむしの里づくりを実施する。

ヨソモノ・ワカモノと緑をつなぐ「三国湊型ワークキャンプ(1泊2日~2泊3日)」-都市民・ヨソモノ・学生・社会人を対象に共同生活をしながら、専門家による森づくり技術の習得と地域活性化に寄与する森づくりについてグループディスカッションを行い、多面的な森づくりを行う。

地域と緑をつなぐ「みどりレーシステム」-地域の民宿・飲食店などにみどりレーサポート店になってもらい、売り上げの一部を地域環境の保全に充てる仕組みをつくる。受け入れ店には卓上のぼりを設置させてもらう。

青と緑をつなぐ「森・川・海の診断」-三国地区と九頭竜川流域ネットワークにおいて森の現状と生物多様性及び川・海の環境を調査診断し、報告会にて発表する。

企業・行政と緑をつなぐ「パートナーシップ」の形成。-福井県環境政策課・環境ふくい県民会議と共同して森づくり活動を持続可能なものとしていく。

上記を地域の優れた人材であり専門性のある県内の中老年・高齢者に教わりながら行う。

これまでの活動についての自己評価・今後の展望

[自己評価]

毎月1回「みどりレー活動」として活動フィールドの松枯や枯木の伐倒・搬出・処理など実践活動を地元住民・専門家とともに実施し、活動が定着しつつあり、今後も継続していく。

活動フィールドは遊べる森・学べる森として、地域の子どもたちや学生の森や緑とのふれあいの場となり、都会から来た人の憩いの場となりつつある。

活動フィールドの植生を調べ木の名札をつけることで、今まで森に関心のなかった人の森への関心が高まり、生態系を考えるきっかけとなっている。

搬出した枯れ木を薪として利用し三国の海水から塩を作り、参加者に配布している。木を伐って利用する意味や森と海とのつながり、海水から塩ができる喜びなどを体験している。

搬出した薪をピザ焼きや料理などに利用している。

9月に2泊3日でヨソモノ・ワカモノと緑をつなぐ「三国湊型ワークキャンプ(1泊2日~2泊3日)」を実地。専門の講師に来て頂き、チェーンソー・伐木の講習会を行い、実践活動を行う上で安全面の意識が高まった。

[反省・課題]

現在「みどりレー活動」で搬出した枯木は一部薪として利用しているが、すべて利用できないのが現状である。今後、炭焼きや薪作りを行って循環型の活動を行っていきたい。

地域と緑をつなぐ「みどりレーシステム」のサポート店の仕組みづくりがまだできていないので、今後模索していく。

企業・行政とのパートナーシップを今後模索していく。

[今後の展望]

三国の森430ヘクタールのうちわずかな森の活動であるが、人が入ることで楽しめる~賑わいの森づくり~のモデル林となり、地域住民、子ども、専門化、高齢者、ワカモノ、都会からのヨソモノが交流できる場となり、他の地域にも広がっていくシステムを作れるように活動を広げていく。

(特定) 環境文明 21

活動名	「経営者の資格」の普及と「経営者「環境力」大賞」の実施
活動区分	国内の民間団体が行う国内の環境保全活動
活動形態	知識の提供・普及啓発
活動分野	総合環境教育
活動の背景	<p>「環境」「経済」「人間社会」のバランスのとれた持続可能な社会を作るうえで、経済活動、特に環境と経営を統合させた企業経営が不可欠である。環境文明 21 では地球環境基金の助成を受け、「グリーン経済」について研究と普及に努めてきたが、その実現には経営者の意識改革が重要であるとの認識から、経営者への環境教育の一つの手法として自己評価票を作成し、「グリーン経済」を実現する経営者に求められる資質・能力に気付いてもらうための 12 項目の資格を考案し、2008 年度には第 1 回「経営者「環境力」大賞」の顕彰・発表会を実施した。</p>
活動概要	<p>環境文明 21 が作成した「21 世紀をリードする経営者の資格」(以下、「経営者の資格」)について、その普及のために全国各地で当会の会員、他の NGO、協力者などと連携してシンポジウムを開催し、それぞれの地域で、環境と経済を統合し持続的な企業経営に取り組む経営者を発掘し紹介する。</p> <p>また、昨年に引き続き、第 2 回「経営者「環境力」大賞」を開催して、優良な経営者を表彰するとともに、事例報告会を行うことで、持続可能な社会作りに向けた企業経営者の意識高揚を図るとともに、その拡大に努める。これらの事例については HP やメディアを通じて、全国に発信する。</p>
期待される効果 (目標と将来像)	<p>「経営者の資格」が一つの羅針盤となり、経営者の意識改革が進む。</p> <p>持続可能な経営に取り組む優れた経営者・企業活動を発掘し、さらにネットワーク化ができる。</p> <p>持続可能な経営に取り組む優れた経営者や企業活動を一般市民に広く紹介することにより、市民意識の向上を図ることができる。</p> <p>「経営者の資格」が、市民が企業を評価する際の指標の一つになる。</p> <p>経営者の教育のみならず、従業員の意識向上にもつながる。</p>
助成 1 年目の実施内容	<p>「経営者の資格」の普及のために、全国各地でシンポジウムを開催し、それぞれの地域で、環境と経済を統合し持続的な企業経営に取り組む経営者を発掘し紹介した。具体的には、11/1 に富山、11/24 に広島、11/27 に高崎、12/4 に大阪でシンポジウム・ワークショップを開催し、それぞれ 20～80 名の参加者(地元の企業、自治体、NGO、学生など)があった。</p> <p>また、約 350 社に「経営者「環境力」大賞」の応募用紙を配布し、応募の申込みを受け付けた。応募数 13 の中から 7 名の経営者が大賞を受賞し、その第 1 回発表会を 2/16 に東京で開催した(参加者 70 名)。優良な経営者を表彰するとともに事例報告会を行い、持続的な企業経営に向けて、経営者や企業関係者の意識高揚を図った。シンポジウムの参加者などに対して行ったアンケート調査で、「経営者の資格」を環境経営に活かすには、「消費者の意識の変化」、「自らの努力」、「適切な情報の提供」が重要との意見が多くでた。</p>

助成 2 年目の実施内容及び今後のスケジュール (3 年目の予定を含む)

2009 年 4 月 ~	シンポジウムの開催地との交渉。シンポジウムの開催準備等の開始。 グリーン経済部会 (月 1 ~ 2 回の会合・作業会) の開催。 「経営者の環境力シンポジウム」(全国で 3 カ所)、「経営者「環境力」大賞」(東京) について、企画、準備、運営などの打合せをグリーン経済部会で行う。
6 月	「経営者「環境力」大賞」の募集開始。記者発表・発送作業など広報開始。
10 月	第 1 回シンポジウム開催 (川崎) 環境力大賞の応募受付。
10 月	第 2 回 " (仙台) "
11 月	第 3 回 " (滋賀) "
12 月 ~ 1 月	環境力大賞の応募受付の締切。予備審査および本審査の実施。 (企業へのヒアリングを含む) 受賞者への通知。
2010 年 2 月	第 2 回「経営者「環境力」大賞」の顕彰・発表会
3 月	第 2 回「経営者「環境力」大賞」について報告書の作成。
2010 年 6 月 ~	第 3 回「経営者「環境力」大賞」の募集開始。
2011 年 2 月	第 3 回「経営者「環境力」大賞」の顕彰・発表会。

これまでの活動についての自己評価・今後の展望

[自己評価] 2008 年度 (初年度) 事業について

全国 4 カ所のシンポジウム・ワークショップ、および東京での第 1 回「経営者「環境力」大賞」で、あわせて約 250 名の経営者や企業関係者などにご参加いただいた。また、シンポジウムおよび「経営者の資格」のチラシの配布を、数千名の方々に対して行った。活動目標である「経営者の資格」の普及活動は、規模は小さいものの、初年度としては十分に行うことが出来た。

「経営者の資格」(具体的には、「先取りする力」、「事業規模を大きくしすぎない勇氣」、「働く意欲を高める力」、「経済と環境を一体化しようとする意志」など)について、考えたり議論したりするきっかけを多くの人に提供できた。

[反省・課題]

「経営者「環境力」大賞」は、2008 年度が初年度で、全国的にまだ認知度が低い。次年度以降は、インターネット、メディアをより活用して、認知度を高め、より多くの経営者からの応募を目指す。

第 1 回「経営者「環境力」大賞」について事例集を作成し、2 年目のシンポジウムの参加者および希望者などに幅広く配布する。この配布により、経営者や従業員の意識改革が進み、ひいてはグリーン経済の構築に寄与することを目的とする。

[今後の展望]

「経営者の資格」が一つの羅針盤となり、経営者の意識改革が進むよう、今後は P R 活動に初年度以上に力を入れて取り組む。

持続可能な経営に取り組む優れた経営者や企業活動を発掘し、そのネットワーク化を図る。次年度以降も、優れた経営者や企業活動の事例をより多く集め、発信していく。

昨今の不景気の影響で、企業も「環境対策よりまずは経営」というところも依然としてあるが、その一方で、経済を活性化するためには「環境」しかないとの認識も拡がりつつある。このような時代だからこそ、企業は持続可能な企業経営に力を入れ、そのことにより新たなビジネスチャンスや、新たな雇用環境や、地域の活性化などにつながるよう、新しいアイデアを出し合える場の一つとして、シンポジウム等を開催したい。

(特定)川に学体験活動協議会

活動名	川をフィールドにした体験型キャンプの充実
活動区分	国内の民間団体が行う国内の環境保全のための活動
活動形態	実践
活動分野	総合環境教育
活動の背景	
<p>昨今、友達とのコミュニケーションのとれない子どもが増加している。そのような子どもが親を殺したり、兄弟を殺したりする犯罪が増え社会問題となっている。川での自然体験活動をすることを通じて命の大切さ、自然の大切さ、怖さ、友達と協力することの大切さなどを学習できることが期待できる。また、最近の学校における環境学習については大分経験が蓄積されつつあるが、まだ実際に川での活動については一部の学校でしか見られないのが現状である。多くの学校において川での自然体験を取り入れられないで居るのは、技術知識や指導者不足などの課題が解決できないでいるのが実情であろうと推測される。さらに、昨年度は川での水難事故が多発したこともあり、より川での自然体験活動に対して指導者が臆病になってしまっている。</p>	
活動概要	
<p>平成20年度にモデル的に全国各地でサマーキャンプを全国7カ所で開催してきた。今年度は昨年、開催した地域におけるさらなる充実を図る一方で新たな地域での展開を増やしていく。水辺での体験活動のスキルを持った指導者と一緒に川下りや水生生物観察、地域での歴史や風土を学び、自分たちで食べ物を作ることや寝るところを作る活動、水辺でのリスクマネジメント講座をゲーム的に展開する。今年は文部科学省の推進する小学校における長期自然体験活動事業を考慮し自然と環境についての教育効果をさらに高めるプログラムの構築を目指す。長期自然体験をすることにより自然を身近に感じ自然環境保護についても知識だけではなく生の環境保護などを感じる目を養いまた実際に体験をする。また、今回の体験の1日の終わりには日記を必ず作成することや、指導者同士のミーティング</p>	
期待される効果(目標と将来像)	
<p>自然体験長期キャンプを体験することによって、日常の便利な生活から離れ自然の中で生活することによって、自分の思いのままにならないことがたくさんあることをわかる。しかし、それと共に大自然の素晴らしさや力強さ、恐ろしさを実際に体感することにもなる。自然の素晴らしさを目の当たりにして自然環境についてこれから自分たちが出来ることはどんなことが気づき、感じる事が期待できる。</p> <p>また、自然の素晴らしさを感じて五感が養われ道徳観や倫理観なども養われることも期待できる。</p>	
助成1年目の実施内容	
<p>鹿児島県川内川、福岡県紫川、岐阜県板取川、栃木県那珂川を夏休みの期間を利用して7泊8日のサマーキャンプを開催した。また、春休みの期間を利用して青森県白神山地、熊本県白河江津湖、福岡県海の中道公園で2泊3日の日程で小中学生を対象として、10名程度の参加者で開催した。</p> <p>キャンプのプログラムについては、オリエンテーション 川で楽しく遊ぶ安全講座 川を知る、川の環境を体験する 川と自分たちの暮らし 自ら行動する(川の魅力発見) 自ら行動する(チャレンジプログラム) ふりかえりなどの中心に「生きる力」「自然の大切さ、怖さ」「川と森の海の人の大切さを知る」などの達成目的を決めて行った。普段取り組めないキャンプならではの星空観察、夜の森探検、野外料理などわくわくどきどきの環境教育の素地を養成した。</p> <p>また、岐阜県のキャンプでは事前、事後に参加者した子どもたちから、「自然を守りたい」、「物を大切にする」、「自分を大切にする」などのアンケートを行った。</p>	

助成2年目の実施内容及び今後のスケジュール(3年目の予定を含む。)

「川の自然体験サマーキャンプ」

開催場所については全国各地の5ヵ所程度の河川(福岡県、岐阜県、岐阜県「馬瀬村」)については実施ができたが、7月の天候不順や新型インフルエンザのお陰で参加人数は集まらずに中止になった地域もある。対象は小中学生で、夏休みの期間に実施した。9月の連休に青森でキャンプを実施する予定。プログラムについては川で楽しむための安全講座「川での安全(DVDを使ってのリスクマネジメント講座)やキャンプ時の安全のレクチャー」アイスブレイクや自然についてもレクチャーをする。川遊びをしながら川を知る、川の環境を考える(生物観察や川の環境や歴史を学ぶなど)地元のお年寄りなどに昔からある川遊びや川の由来を話してもらう。地域の特色を持った遊び方や伝統や歴史などの話を聞き体験をした。キャンプリーダーやカウンセラーによつての1日の「ふりかえり」などを行った。また、子どもたちが自然体験をして一番好きな体験の絵日記を書いたり作文を書いたりもした。事前事後でどれだけ自然や環境について、また、社会性について変化したかアンケートや事前事後の絵や作文から見られた。

来年については子ども編集部を作って今までに集めた絵や作文などを子どもたちが編集をして、また、新にキャンプ体験をして実際に自分たちが感じた地球環境の危機などを川(指標生物や水質検査など)から読み取りその結果を冊子にまとめる予定。

これまでの活動についての自己評価・今後の展望

【自己評価】

親元から離れゲームやパソコンなどのない日常の世界からも離れて友達と一緒に自然の中で過ごすことは子どもたちにとっても新しい発見やワクワクドキドキがたくさんあるように思われた。自分たちで自炊することによって、食べ物を大切さや生き物の大切さなどを身をもって感じる事ができたように思われる。また、川流れやカヌー体験、トレッキングなどの自然活動体験によって自然の素晴らしさや怖さ、楽しさを体感できたことだと思ふ。

子どもたちの興味が自分の周りのことから自然界に移っているようにも思われた。5年生の子どもたちはゴミの分別などを下級生の教えているところも見られて。

キャンプ就労時の簡単なアンケートなどで自然が大切であると実感する子どももいた。

【反省・課題】

昨年も感じられたことだが長期のキャンプなので場所の調整や参加者の確保や時期の調整などが大変である。また、野外活動なので天候によって体験が制限されることが多々あり場合によっては中止するということもあった。

川での体験や自然界での体験活動なので指導者たちの安全やその他のスキルについても高いレベルが求められると思う。また、長期の自然体験活動なので保護者たちへの事前に説明会など必要に思われた。特に特別な子どもなどへの配慮も必要である。(食物アレルギーなどや少し自閉症気味の子どもなど)

また、毎回感じることであるが参加者集めがとても大変である。

【今後の展望】

行政や地域のコミュニティと共同することによって地域の行事や昔からの地元の伝統なども学ぶことが出来る。また、行政や地域との結びつきを強くすることによって広報についてもスムーズになると思われる。

指導者たちの体験活動プラス環境活動についてのスキルの研修を行う。一部の小学校で総合学習の時間を使って川での環境教育を推進している小学校があるがもっと小学校と連携をして川での環境教育ができるような仕組みづくりをして行く。また、子どもたちの川のキャンプ体験の文章や絵、アンケートなどを集計・編集をしてキャンプ体験する以前と以後の意識の違いを冊子にまとめる。冊子にまとめることで川での体験活動の効果を世間に周知させることができ、また、参加者集めもスムーズに行えるようになると思われる。

キャンプを行った指導者たちを集めてキャンプ時の子どもたちの様子について指導者たちの感じた意見や感想、地球環境保全についてのこれから自分たちがどのように子どもたちを導いていくのかを話しあう、またその後意見などを集約する。